様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 6 月 15 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2009
課題番号：19720215
研究課題名（和文）　海浜部古墳の考古学的研究

研究課題名（英文）　ARCHAEOLOGICAL STUDY OF ANCIENT TOMB NEAR SEA

研究代表者
宮元　香織（MIYAMOTO　KAORI）
北九州市立自然史・歴史博物館・歴史課・学芸員
研究者番号：80435908

研究成果の概要（和文）：
古墳時代、島嶼部や船でしか近づけない海岸付近に造られた古墳について、現地調査・測量調査をおこない、その性格に迫る研究をおこなった。その結果、現在まで考えられてきたようにすべてを海人の墓とするには問題があるということがわかった。また、未報告の島嶼部古墳について、墳丘の測量調査と内部の実測調査をおこない、調査報告として公開した。その他、古墳時代後期において、海を介して伝わる技術について研究し、論文を著した。

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	900,000	0	900,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,300,000	420,000	2,720,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：人文学・史学・考古学
キーワード：日本史・古墳時代・海人・古代国家

１．研究開始当初の背景

先行研究において、島嶼部や船でしか近づけない海岸部に造られた古墳の被葬者は、いずれも広い意味での“海人”―すなわち漁業に携わったり、外洋航海を主導したり、船を使った交易に従事したりした人々であると考えられてきた。判断の根拠となったのは、古墳と海とのあまりに近い距離であり、またかなり少ないが、古墳の中に副葬される漁労具であった。しかし漁労具が古墳から出土することはあまりに少なく、また立地のみで古墳被葬者の性格を断じてしまうには問題があろう。

同じような考え方が古墳時代研究全般に浸透しており、武器よりも装身具を中心とした副葬品をもつ古墳の被葬者は女性首長、中国大陸や朝鮮半島で作られた副葬品が数多く出土する古墳の被葬者は渡来人、というように副葬品の構成をもって被葬者の性格を推理する傾向が強い。

しかし果たしてこれら副葬品や古墳の立地にみる特異な状況をもってすぐに「特殊である」と判断していいのだろうか。

いっぽう、日本古代社会の支配構造について考える際、「中央」と「地方」という語句は必須のキイワードとなっており、古墳時代

研究においても頻繁に使われてきた。いまやこのキイワードや概念を使わずに古代社会研究や古墳時代研究について語られることはないといってよい。しかしながら「中央」と「地方」という語句を使うことによって、検討すべき問題が見えなくなってしまうのもまた事実である。

特に弥生時代以降、古代にいたるまで、畿内という地域の卓越性・先進性にかんしては、疑う余地のないものとされてきた。つまり畿内地域は常に政治、軍事、外交、祭祀、技術すべてにおいて他を圧するほど卓越していた、というイメージが多くの古代社会研究を支配してきた傾向にあるといえる。

そのような中、畿内という地域を始めから「中央」と認識して検討するのではなく、ひとつの地域として相対化し、他の地域と同じレベルで検討すること、また「地方」についても、その位置や特殊性にのみ着目するのではなく、近隣地域との関係性を解きほぐしながら検討をすすめる必要がある。

まとめると第一、古墳時代島嶼部や海岸部に造られた古墳の検討はいまだ途上にあること、第二、特殊な立地や特殊な副葬品をもって被葬者の性格を考える傾向が古墳時代研究には支配的であること、などが問題と考えられる。

以上のような現状を受け、数年前より島嶼部古墳の現地調査を進めつつ、測量調査が可能な古墳について事前調査をおこなってきた。また、関連する文献資料の検索や複写等も進めている。また、一部の島嶼部の古墳については、すでに活字化したものがあり、更なる検討が必要であると考えるに至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、「中央」と「地方」というキイワードをもとに、特に後期を中心とした古墳時代の社会構造がいかなるものであったのかについて解明することである。なかでも下記の３点について特に注目して検討をすすめる。

第一に、これまで全国的な検討がなされなかった島嶼部に造られた古墳、陸から近付くことのできない海岸部に造られた古墳などを初めて全国的に検討し、基礎資料を収集するものである。海岸部に近いところに造られた古墳の特殊な立地の原因を分析し、被葬者の性格を検討することで、古墳時代の地域支配構造の一端を解明できると考える。その際、海に近い立地の古墳を、「中央」「地方」関係でいうところの「地方」になぞらえて検討を加えることで、より詳細な検討がおこなえるだろう。

第二に、真の「中央」と「地方」―すなわち近畿と列島各地―の関係性について、改めて考え直すことである。特に古墳時代後期の社会において、九州を先進地として始まった横穴式石室の構築技術が、東に移動していく点についても検討を加えることで、古墳の性格の一端を解明できるであろう。

３．研究の方法

研究の方法は文献検索、現地調査、資料調査、整理分析、成果報告の５つに分けられる。

文献検索は対象となる古墳の発掘調査報告書や自治体史、刊行図書などを閲覧・複写し、基礎的な情報を収集する。古墳それぞれにたいして、データの多寡があるため、この情報収集によって現地調査の対象となる古墳が決定する。

現地調査は、文献検索で収集したデータのうち、資料の遺存状況がよく、かつ古墳が良好な状態で残されているものを中心におこなう。現地に赴いて古墳の立地、開口部方向、周辺の首長墓、集落等の位置関係を調査する。また、報告書等が刊行されておらず、基礎資料がないものについては、測量器具を用いて、測量調査をおこなう（図１）。主に古墳の墳丘の平板測量図作成と主体部の実測（図２）をおこない、古墳の情報を可視化する。あわせて遺構の写真撮影等も実施する。

（図１）墳丘の測量調査

（図２）主体部の実測図・原図

資料調査は、出土資料のうち良好なものを中心におこなう。主に古墳の築造時期の基準となる資料について調査する。合わせて遺物の写真撮影等もおこなう。

整理・分析は、以上の調査によって得られた情報を整理し、分析することである。測量調査したデータをスキャニングし、デジタルトレースし、整理する。周辺古墳と比較し、調査した古墳の性格について分析する。またその結果によっては新たに資料調査や現地調査を追加しておこなう。

成果報告は、分析の結果をまとめて学会や研究会などで発表し、また測量調査の成果を紙上発表などをおこなう。

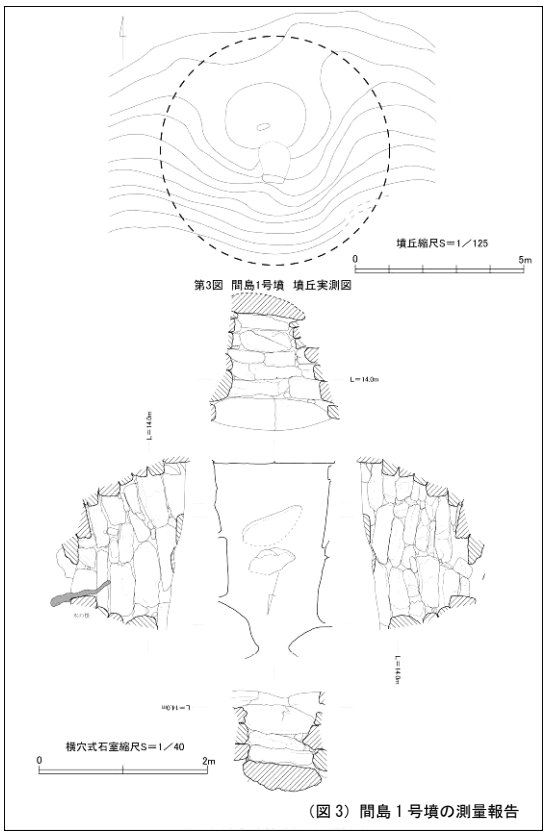
４．研究成果

研究成果は大きく分けて、測量調査報告と研究論文の二つに分けられる。

測量調査報告、第１点目は、2006 年からおこなってきた愛知県幡豆郡佐久島における平古３号墳の測量報告を雑誌に投稿したことである【雑誌論文(1)】。この調査は、複数の研究者と共同でおこなったもので、新しい知見とともに未公開の古墳の測量図を報告することができた。

三河湾に浮かぶ佐久島には、古墳の存在が確認されているものの、その実態についてはいまだ解明の途上にある。今回は比較的浜辺に近い群集墳中の一基の古墳について測量を行った結果、群内における編年的位置関係を知ることができた。また島内の古墳の分布調査をおこない、もっとも古い段階に築造された秋葉山古墳の測量が次の課題となった。秋葉山古墳の測量調査については、すでに終え、報告書を作成中であるが、いまだ発表に至っていない。今後の課題としたい。

第２点目の報告は、2006 年からおこなってきた福岡県北九州市間島所在、間島古墳群の測量調査の報告を雑誌に投稿したことである【雑誌論文（3)】。佐久島の平古古墳群と同じく、古墳時代後期に築造されたとみられる間島古墳群は、存在が知られているのみで、



（図３）間島１号墳の測量報告

（図４）海から見た間島

その実態については不明な点が多かった。

2006 年度から地元研究者やボランティアの協力を得て、継続的に島内の踏査・分布調査・墳丘測量をおこない、それらのうちもっとも依存状況のよい間島１号墳の墳丘と横穴式石室の測量図、それぞれの写真についても公開した（図 3)。

なお、これまで間島にかんして、陸側から撮影した画像はかなり多く見られたものの、船に乗って海中から撮影した画像は公開されていなかった。当然ながら島の古墳にとっての生産基盤であり、かつ間島の場合は被葬者の生活地である陸との関係は切っても切れないものであり、この距離感を示す画像が必要なのは言うまでもない。今回の報告において、海側からの画像を初めて公開できた（図 4) ことも大きな成果といえるであろう。

また測量報告のなかでは、間島の対岸部に造られた下吉田古墳群との関係性から、島という特殊な状況に造られた間島古墳群の被葬者の性格についても分析した。

島という特殊な状況に葬られた被葬者の性格については、一般に“なんらかの特殊な事情によって、あえて島を埋葬地に選んだ”と考える傾向が強いことはいうまでもない。しかし今回の分析から間島１号墳の横穴式石室の構造は、対岸の下吉田古墳群のそれとほぼ同じ工人集団の手によるものであり、かつ築造の契機や時期についても、ほぼ同じと考えられる。また対岸に造られた下吉田古墳群は、陸地伝いに近付くよりもむしろ、船を使った方がより容易に近づけるといえ、両者の間に特に立地的な差異はないと判断した。

また、研究論文の第１点目では、島嶼部や海岸部に造られた古墳について、玄界灘を中心に検討した【雑誌論文（2)】。

ここでは島嶼部や船でしか近づくことのできない海岸部に造られた古墳の事例を、立地、墳形、墳丘規模、主体部の構造と正面観、出土遺物、築造時期のほか、在地古墳との関係性などそれぞれに検討し、その性格について分析した。

これによると、島嶼部や海浜部に造られた古墳には、玄界灘周辺というごく狭い範囲においても群集墳と単独墳、近隣地域の墓制と

連続するものとしないもの、島内で単一系譜と複数系譜など、多種多様な性格のものがあることがわかった。その検討から、これまで海人との関連が強いと考えられていた古墳についても、検討の結果そうではないと思われるものがいくつかみられた。これらについては、その他の条件の検討から、地域の脈絡の中で理解する必要があるといえる。あえて可耕地を避けて古墳が造られた理由について今後追及していきたいと考える。

いっぽう、島内で完結せず、より広域的な関係性を想定しなければならない古墳も含まれており、これらについては、超地域的な視点をもち、各地の事例を収集し詳細な検討をおこなうことで解明できると考える。ともあれ、この論文によって、島嶼部や海岸部に造られた古墳研究にたいして、新たな研究視点が加わったといえる。

また第2点目では、日本海側を伝わる技術である横穴式石室の構築方法について、日本考古学協会で研究発表し、論文を著した【学会発表(1)、図書(1)】。

本論文では、北陸の横穴式石室にみられる新来の要素、特に九州の横穴式石室の構造的特徴について検討した。石屋形、石棚、板石閉塞、素掘りの墓道などの九州的な石室構造とともに、九州に特有の横口式石棺などが北陸を含めた山陰各地にみられることに注目し、検討をおこなった。

この検討によって、少なくとも古墳時代後期に、九州から新潟までの日本海沿岸部において墓制の共有関係があったことがわかった。さらにこの共有関係は、畿内やその他の地域には共有されていないことが分かっている。特に若狭の横穴式石室については、本州でもっとも早く導入されており、畿内はその後遅れて横穴式石室を受け入れることからも、当時の「中央」と目される畿内を介さない動きが存在していたことがわかった。

なお、この論文においては強調しなかったが、特に日本海側の古墳時代首長は、葬送方法の一部に共有関係をもっていると考えられたが、その共有関係を作りえた理由については今後検討したい。

最後に列島各地の島嶼部古墳の調査を実施できたことも大きな成果といえる。東京湾周辺の古墳や房総半島の古墳、伊勢・志摩の離島に造られた古墳、熊本・八代海周辺の古墳、壱岐、隠岐の前方後円墳などについても期間内に調査することができた。これらの調査の成果については、活字化できた論文に十分反映されていないが、これからの研究の中で成稿を目指していきたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

(1)森島一貴・西谷麻衣子・田中奈津子・笹栗拓・宮元香織・藤井康隆 2007「三河湾佐久島における後期古墳の研究(1)」『三河考古』19 号（査読無）：17-31

(2)宮元香織2007「島嶼部の後期古墳について―玄界灘周辺の事例を中心に―」『古墳時代の海人集団を再検討する』（査読無）：293-306

(3)宮元香織2010「北九州市小倉南区所在間島古墳群の調査」『北九州市立自然史・歴史博物館研究報告B類歴史』第７号（査読無）：1-8

〔学会発表〕（計１件）

(1)宮元香織2007「北陸における九州的な横穴式石室について」日本考古学協会 2007 秋季大会、10 月 20 日-21 日、熊本大学

〔図書〕（計１件）

(1)宮元香織2009「北陸における九州的な横穴式石室について」『九州系横穴式石室の伝播と拡散』北九州中国書店 129-154

６．研究組織

(1)研究代表者

宮元　香織（MIYAMOTO KAORI）
北九州市立自然史・歴史博物館・歴史課・学芸員
研究者番号：80435908